陰陽道神・泰山府君の生成

プレモセリ・ジョルジョ

〔抄　録〕

本論では、泰山府君を中心に陰陽道における祭祀と祭文という視点から平安後期における陰陽道の「宗教性」に関して考察を試みる。そのため、泰山府君が『今昔物語集』の中でいかに描かれていたかに着目し、古記録から泰山府君祭の記録に焦点を当てる。さらに、陰陽道独自の世界観を描いている祭文から泰山府君はいかなる陰陽道神であったかを検討する。祭文の中では、泰山府君が「冥道諸神十二座」の「十二冥道の尊長」として新たに位置づけられるが、このような展開は、『今昔物語集』や古記録にはみえない。十二世紀初期から安倍泰親が安倍家の陰陽師としての権力を押し出して、泰山府君祭を作り上げた始祖安倍晴明のように泰山府君の利益を貴族社会に宣伝した。平安後期の祭文における陰陽道固有の世界観の中では、泰山府君は顕密体制論の中の仏教的存在には解消できない面も見えてくる。そのことによって、祭祀や祭文を中心に考える見方が陰陽道研究の新たな展望を示していくだろう。

キーワード　陰陽道神、泰山府君、都状、今昔物語集、儀礼

はじめに

陰陽道の研究史は二段階にわけることができる。一段階が「中国起源説」、二段階が「日本起源説」である。従来、「陰陽道」とは、古代中国に起った陰陽五行説を中心とする思想とそれに基づく諸技術をさすというように位置づけられた[1]。

しかし、現在、これらの説は山下克明をはじめ、陰陽道の研究では否定されている。「陰陽道」という用語は中国や朝鮮半島にはみられず、九世紀後半から十世紀にかけて日本でつくられたものであることが明らかになったのである[2]。その背景に、奈良時代の律令制下に成立

した陰陽寮の官職名「陰陽師」の職務が平安初期から律令に規定された枠[3]からはみ出し、「祭祀」の領域が拡大することがみられる。さらに、平安中期に、陰陽寮の官職名をさす「陰陽師」とは別に、一種の職業的宗教者として「陰陽師」の名称が社会的に通用していく。このように、平安中期に職業的宗教者としての陰陽師を中心に成立して発展したのが、「陰陽道」という呪術宗教だったのである。[4]

その上、十世紀から十一世紀には密教との競合や浄土信仰をもとに、陰陽師は独自の祭祀を作り上げて「現世的な延命救済」といった宗教性を深めていく。[5]その祭祀の中に、陰陽師たちが『古事記』『日本書紀』及び諸仏菩薩・天部・明王などとは異なる系統の神々を作り上げていく。[6]陰陽師に祭られる神々は、泰山府君と天曹地府、さらに中世には牛頭天王、金神、八王子、大将軍、盤古大王など、冥界や疫病、あるいは暦や方位などに関わる神々である。[7]本論は、その中から「泰山府君」に焦点を当てて、いかなる陰陽道の神であるかに関して考察を試みしたい。[8]

泰山府君の由来は中国にあった。東晋時代（四世紀）に成立した志怪小説『搜神記』では、泰山に宿る神格は泰山府君とある。[9]泰山は中国山東省泰安市にある五岳の一つで、古代中国において信仰を集めた。泰山は死霊の赴く霊山とされ、その頂上には泰山府君がおり、人間の寿命の記録である死籍を管理していると信じられていたのである。[10]

泰山信仰はおおよそ東晋時代に道教に吸収され、泰山府君は道教における冥界の君主としての役割を与えられた。秦始皇帝は、泰山に登り、王権の維持のため天地に感謝する祭りとして「封禅の儀礼」を行うことを恒例とした。[11]泰山府君は冥界の神として信仰され、延命長寿などは現世利益を祈願するために、泰山を訪れる人は少なくなかった。[12]

やがて隋唐時代（六世紀〜七世紀）に、本来『リグ・ヴェーダ』に死者の国王ヤマ（Yama）がインド密教において南方護国の閻摩天として登場した後、中国仏教に取り込まれ、地獄信仰の中に閻羅王として位置づけられる。そこで、泰山府君は閻羅王との連携により、道教における冥界の君主としてだけではなく、仏教の他界である地獄の中に役割を与えられた。仏教では、地獄の権力者として人間の罪を裁き、死籍を司る閻羅王が存在したため、道教との習合により階層制度ができ、閻羅王は冥界の天子とされ、泰山府君はその下位の尚書として新たに位置づけられた。[13]

陰陽道の研究史の中では、山下によれば、泰山府君は陰陽道諸神とともに、仏菩薩の変化・垂下とする顕密仏教の世界観のなかにあり、その秩序に組み込まれる存在と考えられていたと述べている。[14]このように、陰陽道は迷信やまじないではなく、仏教を補完する立場として存在していた。泰山府君も、国家の権力を維持する神格として祭られていたことが見えてきたのである。

しかし、顕密体制から考えられた陰陽道では、仏教を補完する信仰として存在しており、独自の世界観を持っていないように描かれている。陰陽道の成立は仏教と不可分にあったことがたしかである。しかし、陰陽道神＝泰山府君は顕密体制の一角を担う仏教神に解消されるのだろうか。

本論では、陰陽道神としての固有性を考えるために平安時代中期に

成立した「泰山府君祭」を中心に、陰陽道における祭祀と祭文という視点から陰陽道独自の「宗教性」に関して検討を試みる。そのため、泰山府君について説話や古記録の解読から「儀礼」を中心に考察し、さらに、泰山府君が「祭祀」の言語である「祭文」にいかに語られているかを追求する。この立場は、近年、近代的な宗教概念からは低次元とされた「儀礼」[15]の側に、近代的な宗教観[16]を越える可能性を見出そうとする方法を踏まえるものである。[17]陰陽道の儀礼を実修している者達、すなわち陰陽師が当時に、使用した儀礼のテキストから考えることで、山下が提示した顕密体制の補完という視点からは見出せない「儀礼」特有の実践世界を見出す試みである。

そのため、本論では、まず、第一章に平安中後期に作られた説話や古記録の中でいかに泰山府君が描かれているかをみていく。説話の中では、『今昔物語集』に焦点をあてて、震旦部と本朝部における泰山府君の様々な姿に注目する。次に、泰山府君祭がいかに行われたかに関して古記録からみていく。当時いかなる事情で泰山府君祭が行われたか、儀礼の外側にいる貴族官人、つまり祭祀の利益を受ける側にいる者達が泰山府君祭をいかに見ていたかを検討する。第二章では、陰陽道独自の世界観を描いている祭文に論点を移し、儀礼のテキストである祭文をみていく。特に『台記』にみえる泰山府君都状に焦点を当てて、その中で、泰山府君が「十二冥道の尊長」として位置づけられることを明らかにする。さらに、『台記』にみえる泰山府君祭の実践者である安倍泰親に注目し、泰親の特異な立ち位置を検討した上で、泰山府君に対して新たに考察することを試みる。

以上のように、九世紀後半から十世紀にかけて成立した陰陽道が十二世紀に入って、いかに独自の宗教性を高めていくかに関して見ていくのが本論の目的である。以上の議論を踏まえて、改めて陰陽道を儀礼独自の世界観から見ていくことによって、顕密体制論から述べられた陰陽道といかに異なっていくかという問題点が浮かび上がるのではないだろうか。

第一章　説話・古記録における泰山府君

十二世紀初頭に成立したとされる説話集『今昔物語集』には、震旦部に三話・本朝部に一話の話が泰山・泰山府君・泰山府君祭に関して語られている。以下、それをまとめたものである。

①震旦部―巻第七・第十二話
②震旦部―巻第七・第十九話
③震旦部―巻第九・第三十六話
④本朝部―巻第十九・第二十四話

まず、震旦部から考察を進めていく。

第一節　『今昔物語集』―震旦部の中の「泰山府君」

①震旦唐代、宿大山廟誦仁王経僧語第十二[18]

今昔、震旦ノ唐ノ徳宗皇帝ノ代ニ、貞観十九年ト云フ年、一人ノ僧有リ、其ノ名及ビ、住所ヲ不知ズ。大山府君ノ廟堂ニ行キ、

宿シテ、新訳ノ仁王経ノ四无常ノ偈ヲ誦ス。夜ニ至リテ、僧、夢ニ「大山府君来テ示シテ宣ハク、『我レ、昔シ、仏前ニ有テ、面リ此ノ経ヲ聞シニ、此レ、羅什ノ翻訳ノ詞及ビ義理ニ等クシテ違フ事無シ。我レ、此ノ読誦ノ音ヲ聞クニ、心身清涼ナル事ヲ得タリ、喜ブ所也。然レドモ、新訳ノ経ハ猶、文詞甚ダ美也ト云ヘドモ、義理淡ク薄シ。然レバ、汝ヂ猶、旧訳ノ経ヲ可持シ』ト。亦、毘沙門天、経巻ヲ与ヘ給フ」ト見テ、夢覚ヌ。

其ノ後ハ、僧、旧訳ノ経ヲモ並ベテ同ク誦持シケリトナム語リ伝ヘタルトヤ。[19]

震旦の唐の徳宗皇帝（在位七七九―八〇五）の代、貞観十九年という年に一人の僧がいた。[20]その名前と住居は不明である。その僧が「大山府君[21]」の廟堂に行って宿り、新訳（不空訳）の『仁王経』の無常・苦・空・無我の義を説いた偈を唱えた。すると、夜になって、僧の夢に「泰山府君が来て示していうのには『我は、昔、仏の前にいて、直接にこの経典を聞いたところ、この経は鳩摩羅什の翻訳（旧訳）の文章や義理に等しくて違う点もない。我は、この読誦の音を聞いて心身清涼なることを得た。喜ぶところである。しかし、新訳の経は確かに文章が甚だ美しいと言えるが、義理が薄いものである。そうであるから、当然に旧訳を保つべきである』と。その上、毘沙門天が経巻を与えてくださる」ということを見て、夢から覚めた。その後は、僧が旧訳の経典をも一様に並べて同じく読誦したと語られている。[22]

この話に関して、小峯和明は『仁王経』の新訳・旧訳の拮抗が背景にみられることを指摘している。さらに、泰山府君はその経典の読誦により「心身清涼」を得たことから、泰山府君はすでに穢れを負った不浄身であって、仏法の諸菩薩、諸天とはまったく異なる位置にあったと述べている。[23]泰山府君は経典を読んでもらう穢れを負った神として描かれていることから、仏教の功徳が強調されていることも窺える。[24]仏教の三国世界観を描いている『今昔物語集』の中では、震旦部における泰山府君は仏法の諸仏菩薩、諸天とは別の神格として登場し、仏教の経典の力によって「心身清涼」を得たというように表現されている。つまり、この話の泰山府君は経典の重要性を全面に押し出していると言えるだろう。本話の主題は最終的に『仁王経』の功徳にあり、泰山府君がそれを僧に教える仲介者的な立場にある。しかし、仏教世界観においては、泰山府君が直接仏から経典を聞いている高位的立場にいる神として描かれていることも指摘できる。

②震旦ノ僧、行宿太山廟誦法花経見神語第十九[25]

（紙数の関係で原文は略す）

震旦の隋の大業（六〇五―六一六）の代に一人の僧が「太山」の廟で宿をとろうとしたときに、廟守りの人に「ここには、別の建物はない。だから、廟堂の廊下に泊まってください。ただし、これまでにこの廟に来て泊まった人は、必ず死んでしまう」と言われるが、僧は「死ぬことは避けられない。私はそれを恐れない」と答えて、廟の廊下に泊まることにする。夜になって、僧は静かに座って経を唱える。

すると、堂の奥に環の音がして高貴な人が現れて僧に礼をする。僧が「この廟に泊まって死んだ人が多いが、神が人を害するはずがない。神様、私を守ってください」と言うと、神は、「我は人に害を与えることはないが、我が出てくると、人がその音を聞いて恐ろしがって自然に死んでしまう。我を恐れないでください」と言う。僧が神を近くに呼んで対話をする。僧が「泰山は人の魂を納める神と聞いているが、本当ですか」と尋ねると、神は「そうです。あなたは前に死んだ人で、会いたいと思う人がいますか」と言うと、僧が「先立った同学の二人に会いたい」と頼み、その神に二人の姓名を伝える。[26] すると、神が一人はすでに転生したが、もう一人は地獄にいるので会うことができないが、地獄へ案内すると答える。僧が神に連れていかれて、地獄に同学の仲間が苦しんでいる姿をみて、仲間を救いたいと述べる。すると、神が「仲間のために速やかに『法華経』を書写し、奉りなさい。そうしたら、仲間が罪から免れる」と言う。その後、僧が本拠に戻り、同学の一人のために『法華経』を書写する。その行動を神に告げるために、大山の廟に戻り、無事に転生したことを神に言われる。そこで、僧が喜び、廟に『法華経』を奉納したいと言うと、神が「ここは、不浄な場所であるので、経を安置するべきではない。本拠に帰って、寺に経を送り奉ってください」と言う。このように、僧が神の言葉の通りにした。思うに、それまでその廟に行った人は誰も生きて帰らなかったのに、この僧だけは神にも敬われ、同学の僧の苦も救い、貴く帰ってきたと語られている。

この話は、僧が『法華経』の書写により、同学の一人を救ったという仏教の功徳を説くものである。泰山府君は、経典の重要性を述べることや、その経典の奉納を拒否している理由に廟が不浄な場所であることを教えるという役割を持っている。

この話から、泰山の廟の廊下は一種の異界であり、地獄へとつながる不浄な空間であることが読み取れる。[27] また、廊下（境界）と地獄は一つの空間ではなく、異なる空間として描かれたことも推測できる。[28] その廊下に現れる神は、話中に「泰山府君」と表記されないが、泰山の廟堂に現れることから泰山府君と理解できよう。[29] さらに、この話では、泰山府君は「神」としか表記されていないこと、僧から恐れられることもなく近くに呼ばれることからも低位的立場として描かれていることも指摘できる。

泰山府君が宿る廟は不浄な場所として描かれていることは、①にみえる泰山府君が穢れを負っていることと類似している。つまり、不浄な場所（廟）に宿る泰山府君は不浄身として穢れを負っているように表現されているのである。

②の話も、泰山府君は仏教の世界観の中に位置づけられ、仏教の功徳を仲介する神として描かれている。しかし、泰山府君自身は、死者を救済する力をもつ神としては描かれていないのである。その救済は、仏教経典によるものであり、その功徳を実現させるのは、泰山府君に敬われる僧である。

③震旦賭仁債願知冥道事語第卅六[30]　（紙数の関係で原文は略す）

震旦の隋の代に、韭仁蒨という人がいる。幼い時から経書を学び、神を信じなかった。その有無を確かめようと鬼をみる方法を学ぶが、十年間も効果が現れない。ある時、十年のあいだ道で出会ってきた大官らしき人から突然話しかけられて、交際を求められる。彼は成景と名乗る鬼で泰山府君の統治下に長官を務めている。毎月泰山に鬼神を集めているので、いつもその道を通っていたと言う。景は仁蒨に一人の従者を付け、仁蒨の身の上に凶事が避けられるように、従者に災いを予知するように命じて去る。そうするうちに、大業の初めの頃（大業六〇五～六一六）、岑之象という人は、子文本に仁蒨を師匠に付け、書物を学ばせる。仁蒨は文本と師弟の仲になっているうちに、景のことについて文本に話し、鬼に御馳走する計画をたてる。鬼が人間の食事を食べると非常に喜び、文本に礼を言う。それから数年後、仁蒨が重病にかかったときに、景から泰山の配下に欠員ができ、仁蒨が後任として推薦されていると告げられる。仁蒨にはまだ寿命は二十年ぐらいがあるので、急ぐ必要がないと景に言われるが、恐れをなした仁蒨は文本に救済を頼む。そこで、文本は冥府に訴えようとするが、免れそうにない。すると、景は仁蒨に急いで仏画を供養したら、きっと免れると伝え、仁蒨は文本に供養を頼む。その結果、景は救済を宣言するが、仁蒨はそれを信じず、景と議論を始める。すると、景は巧みな論理で六道と人間社会を対比させて、また閻魔王を人間界の天子、泰山府君はその尚書に例え、仏法の善根を述べる。一日二日に仁蒨が立てるようになり、病気が癒えたと語られている。

この話では、毎月泰山に鬼神が集っている中でも、泰山府君は天子である閻魔王の下位＝尚書であること、泰山府君の配下に鬼がおり、官僚的職務を持っていたことから冥府世界に階層が描かれていることがわかる。

仁蒨が重病にかかった際に、「大山ノ主簿ト有リ。主簿、一人闕タル依テ、君ヲ勧メテ其ノ官ト為ムトス」と言われることから、病気の原因は泰山の配下の官職に欠員ができ、仁蒨がその立場に勧められたことがある。その官職に就くことは、仁蒨が死亡するという意味をもったのである。しかし、文本の供養により、仁蒨が救済されることから、①と②のように仏教の功徳により救済される見解がみられる。さらに、仏教による救済は冥府への訴えより効果的であるという位置づけも注目される。仁蒨が救済の宣言を信じないが、景は六道と人間界を対比し、その上、仏の偉大さを語ることにより、仁蒨を納得させることに成功したからである。

景の論理から、泰山府君は人間社会の尚書に例えられ、閻魔王・天子の配下として位置づけられる。仏教における冥界の閻魔王が同じく冥界の泰山府君より高位の立場にあるという位置づけは、仏教世界観によって作られたということがわかる。

以上、震旦部にみえる泰山府君は、冥界の君主である閻魔王の配下の存在として描かれている。さらに、泰山府君の下に鬼が官職に就いていることも読み取れる。泰山府君は、仏法との仲介者的存在として仏教の功徳を押し出して、自らに救済をする力がないように描かれているのである。①と②には、泰山府君は不浄身として経典の重要性を

述べる。③には、仁蕣の重病を癒えたのは、冥府の力ではなく、供養による仏教功徳である。以上の話からは、泰山府君は仏教の世界の中での役割しか与えられていなかったことがわかるのである。

次に、震旦部の三話と比較をしながら、本朝部ではいかなる泰山府君が登場しているかを見ていく。

第二節　『今昔物語集』―本朝部の中の「泰山府君」

④本朝部―巻第十九・第二十四

代師入太山府君祭都状僧の語　第二十四

今昔、□□ト云フ人有ケリ。□□□ノ僧也。止事無キ人ニテ有ケレバ、公ケ私ニ被貴テ有ケル間、身ニ重キ病ヲ受テ、悩ミ煩ケルニ、日員積テ病重ク成ヌレバ、止事無キ弟子共有テ、歎キ悲テ、旁ニ析禱スト云ヘドモ、更ニ其験無シ。

而ル間、阿倍ノ清明ト云フ陰陽師有ケリ。道ニ付テ止事無カリケル者也。然レバ、公ケ私此ヲ用タリケル。而ルニ、其ノ清明ヲ呼テ、太山府君ノ祭ト云フ事ヲ令テ、此ノ病ヲ助ケ命ヲ存ムト為ルニ、清明来テ云ク、「此ノ病ヲ占フニ、極テ重クシテ、譬ヒ太山府君ニ祇請ズト云トモ難叶カリナム。但シ、此ノ病者ノ御代ニ一人ノ僧ヲ出シ給へ。然バ其ノ人ノ名ヲ祭ノ都状ニ注シテ申代へ試ミム。不然ハ更ニ力不及ヌ事也」ト。

弟子共モ此レヲ聞テ、「我レ師ニ代テ忽ニ命ヲ棄ム」ト思フ者一人モ無シ。只「命ヲ全クシテ師ノ命ヲ助ケム」トコソ思ヘ、亦「師失ナバ房ヲモ取リ、財ヲモ得、法文ヲモ伝ヘム」トコソ思、「代ラムト」思フ心ノ露無カラムモ理ハリナレバ、互ニ貞ヲ守テ、云フ事モ無クシテ、居並タルニ、年来、其ノ事トモ無クシテ相ヒ副ル弟子有リ。師モ此レヲ懇ニモ不思ネバ、身貧クシテ壺屋住ニテ有ル者有ケリ。此ノ事ヲ聞テ云ク、「己レ年既ニ半バニ過ヌ。生タラム事今幾ニ非ズ、亦身貧クシテ、此ヨリ後善根ヲ修セムニ不堪ズ。然レバ、『同ク死タラム事ヲ、今師ニ替テ死ナム』ト思フ也。速ニ己ヲ彼ノ祭ノ都状ニ注セ」ト。他ノ弟子共此ヲ聞テ、「難有キ者ノ心也」ト思テ、我身コソ「代ラム」ト不云ネドモ、彼ガ「代ラム」ト云コソ聞バ哀ナリケレ。泣ク者モ多カリ。

清明、此レヲ聞テ、祭ノ都状ニ其ノ僧ノ名ヲ注シテ丁寧ニ此レヲ祭ル。師モ此ヲ聞テ、「此ノ僧ノ心此許可有シトハ年来不思ザリツ」ト云テ、泣ク。既ニ祭畢テ後、師ノ病頗ル減氣有テ、祭ノ験有ニ似タリ。然レバ代ノ僧必ズ死トスレバ、可穢キ所ナド沙汰シ取セタリケレバ、僧聊ナル物具ナムド拈タメ、可云キ事ナド云ヒ置テ、死ナムズル所ニ行テ、独リ居テ念仏唱ヘテ居タリ。終夜傍ノ人聞ケドモ、忽ニ死ヌトモ不聞ヌニ、既ニ夜嗟ヌ。

僧ハ死ヌラムト思フニ、僧未ダ不死ズ。師ハ既ニ病癒ヌレバ、「僧今日ナド死ナムズルニヤ」ト思ヒ合タル程ニ、朝ニ清明来テ云ク、「師、今ハ恐レ不可給ズ。亦、『代ラム』ト云シ僧モ不可恐ズ。共ニ命ヲ存スル事ヲ得タリ」ト云テ、返ヌ。師モ弟子モ此ヲ聞テ、喜テ泣ク事無限シ。

此ヲ思フニ、僧ノ師ニ代ラムト為ルヲ、冥道モ哀ビ給テ、共ニ命ヲ存シヌル也ケリ。皆人、此ノ事ヲ聞テ、僧ヲナム讃メ貴ビケリ。其後、師此僧ヲ哀テ、事ニ触テ、止事無キ弟子共ヨリモ重クシテ有ケル、現ニ理也。実ニ難有キ弟子ノ心也。

師モ弟子モ共ニ久ク有テゾ失ニケル、トナム語リ伝ヘタルトヤ。[31]

ある寺の名僧[32]が重病にかかり、すぐれた弟子の加持祈禱でも治らないので、陰陽道の第一人者「阿倍ノ清明」（以下、安倍晴明）を呼んで、泰山府君祭を行ってもらう。晴明が卜占により、重病であると判断し、泰山府君に願っても治りがたいと伝え、病人の身代わりとしてもう一人の僧の名前を都状に記すことを勧める。しかし、その身代わりになる者はいない。その話を聞いた貧しくてとくに目にかけることもない僧が、自分が身代わりになると申し出て、その名前を都状に記し、泰山府君祭が行う。それにより、師僧の病がすっかり治り、死ぬはずだった身代わりの僧が念仏を唱え、死を待つ。しかし、夜が明けても僧が死なないので、晴明に理由を尋ねたところ、泰山府君が身代わりとなる行為を哀れみ、僧の命を助けたことを人々に告げる。その後、師の僧も身代わりの弟子の僧も長寿を全うして暮らしたと語られている。

この話は、安倍晴明が活躍する有名な説話である。本朝部で泰山府君に関する唯一の話である。ここでは、震旦部の泰山府君との違いがいくつかみられる。まず、泰山府君は加持祈禱でも治せない病気を治す力を持っていることが窺える。震旦部では、仏教経典の功徳が明確に主張されていることに対して、本朝部の話では、仏教の修法でも治らない病気は陰陽道の泰山府君祭により治るというのである。次に、死ぬはずだった僧の命が助かったことについて「冥道モ哀ビ給テ」と晴明が言うことに注目される。震旦部では、経典の書写や供養が、地獄に落ちた人間を転生させ、重病を治すのに対して、本朝部では「冥道」が哀れんで助けたという展開になっているのである。言い換えれば、泰山府君が僧の行為を哀れんで、命を救済したのである。このストーリーからも、本朝部の泰山府君は救済する力を持っている神として描かれていることが窺える。さらに、震旦部では僧が泰山府君とコミュニケーションを取っているのに対して、本朝部では陰陽師・晴明がこの神と対話していることは注目するべきであろう。この話では、陰陽師に祭られる泰山府君が「陰陽道神」へと生成していく様子が見られる。本朝部の泰山府君は陰陽師が祭る陰陽道独自の神として登場しているのである。

本朝部では、仏教ではなく、陰陽道独自の世界観の中の泰山府君が描かれている。晴明が祭る泰山府君が密教祈禱よりも優れた力を発揮することに関して、武田比呂男は仏教と陰陽道の呪術競争に例え、本話は術くらべの説話でもあったと述べている。[33]震旦部にみえる泰山府君は仏教の功徳を仲介する神として描かれているのに対して、本朝部では、仏教の功徳を超えた「陰陽道神」として登場する。この話では、陰陽師が祭る陰陽道神としての生成過程がみられる。その過程の中で、泰山府君祭と都状が重要な役割をもつことが注目されるのである。そこで、次節では、古記録における泰山府君とその祭祀に関してみていく。

第三節　古記録にみえる泰山府君

泰山府君祭は古記録に頻繁に登場する。その祭祀の初見は藤原実資が書いた『小右記』の中の永祚元年（九八九）二月に安倍晴明が一条天皇のために行った記事である。ここでは、天皇のために病気を治療する効果が期待された。以下、その記事を検討する。

十日　辛酉、速朝退出、依喚参院、尊勝御修法・焔魔天供・代厄御祭等奏事由可令奉仕者、日来奉為公家自他夢想不宜、仍所示仰也者、即罷出、未時許内藏寮權曹司焼亡、下人焼死云々、沉病者云々、

十一日　壬戌、参内、皇大后宮俄有悩御、攝政被馳参、昨日院仰事今日申攝政、令勘申尊勝法・太山府君祭日、御修法事□遣天台座主許、御祭□晴明奉仕、暁頭罷出、今夜於南庭祈申南山、是身上事也　（永祚元年二月[34]）

二月十日の記事では、泰山府君祭が行われる予定がなかったことが確認できる。その日は密教の尊勝御修法と焔魔天供、陰陽道の代厄御祭が予定されていたが、十一日の記事では、焔魔天供が行われず、また陰陽道の代厄御祭も行われていない。その代わりに泰山府君祭が行われたのである。

ここから泰山府君祭は焔魔天供に代わりうる力があったことが想定されよう。泰山府君祭と焔魔天供は密接な関係にあったことが窺える。長部和雄によれば、焔魔天供の修法は、唐代密教の「閻羅法」を説く密教次第書『焔羅王供行法次第』にもとづいている。[35]『焔羅王供行法次第』には、以下のような次第がある。

能乞王削死籍付生籍。到疫病之家。多誦大山府君咒。[36]

「能く王に乞ひて死籍を削り、生籍に付す。疫病の家に到らば、多く大山府君の呪を誦す。」延命長寿を祈願する際に閻羅王に乞い死籍を削り、生籍に付けることで寿命をのばすのだ。そのため、病人の家では多く泰山府君に向かって呪文を唱えるという次第である。[37]このように、中国においては、死籍を削ってもらう際に最高位に立つ閻羅王ではなく、その「中継ぎ」にある泰山府君に祈願がなされた。[38]『焔羅王供行法次第』は泰山府君の信仰をみる上で、重要な資料である。これは中国と日本における泰山府君の繋がりを明らかに示しているだろう。

『焔羅王供行法次第』をもとに、泰山府君を中心に独自の祭祀が作られたことで泰山府君祭が生まれた。[39]さらに、永祚元年の記事から、安倍晴明が「実践者」として泰山府君祭の生成過程に重要な役割を果たしたことも明らかである。

安倍晴明が貴族社会にますます泰山府君祭を宣伝したことは、以下の『権記』の史料からみられる。

九日、戊子、令晴明朝臣祭太山府君、料物米二石五斗、帋五帖、

自利成許送之、鏡一面、硯一面、筆一菅、墨一廷、刀一柄、自家送之、晩景送都状等都十三通、加署送之、奉平宿禰招魂祭、直物云々、備中介生昌朝臣、
廿八日、己未、日出依左京權大夫晴明朝臣説、奉太山府君幣一捧・帋・錢、爲延年益筭也　（長保四年十二月）[40]

長保四年（一〇〇二）の記事から、泰山府君祭は藤原行成の延年益算のために行われたことが窺える。また、この史料から「都状」が「十三通」用意されたことも読み取れる。「都状」というのは、冥界の神に送り出す祭文のことを示しており、人の善行・悪行を記した帳簿である「都籍」から名付けられたことが推測される[41]。祭祀では、他に硯・筆・墨が用意されたことから、都状に依頼者の情報を書いて、泰山府君に「都籍」を書き直してもらうことがわかる。また、二十八日の記事では、泰山府君祭の執行が安倍晴明の薦めだったことから、晴明が平安貴族社会に泰山府君の利益を熱心に説いていたことが指摘されている[42]。

次に、『朝野群載』の中の永承五年（一〇五〇）の記事からは、後冷泉天皇の延年のために泰山府君祭が行われたことが確認できる。また、その際に用いられた祭文も伝えられている。さらに、十二世紀初頭には、『殿暦』の中の天仁二年（一一〇九）の記事に夢想の告げにより泰山府君祭が行われたことがみられる。

卅日、癸卯、天晴、依爲修法間、不出行、雖然参院、依召参御前、數剋後退出、及戌剋六月秡如常、次修法時相合、次泰山府君祭也、予着束帯於亭行之、予兩段再拜、有庭中門内也、祭庭中門外也、同門陰陽師泰長（安倍）説也、今夜陰陽師泰長勤之、去比依恠異行之、而件有夢想告、仍大到真重（慎カ）行之　（天仁二年六月）[43]

次に、『朝野群載』の中の永久二年（一一一四）の記事に藤原為隆の昇進・栄達のための泰山府君祭とその祭文が収録されている。また、十二世紀半ばに、『台記』の中の康治二年（一一四三）の記事から藤原頼長が『周易』を学ぶ際に、凶事を予防するために泰山府君を行わせたことがみえる[44]。以下、その記録を検討する。

十二月大乙巳

七日、己丑、雪降、成通卿許送馬、依下向伊勢也、吾欲学周易之、且是所以、可与明年甲子革命之議也、而俗人傳云、学此書者有凶云々、又云、五十後可学云々、余案之、此事更无所見、如論語皇侃疏者、少年可学之由所見也、然而猶恐俗語、因之使泰親祭代山府君、去三日欲祭、依雨延引、今日又天陰雪、秉燭後束帯向川原、乗人車参之儀、于時雪頻降、乍車暫立川原、請府君曰、学易極天地之理者是正道也、鬼始也者邪心也、邪勝正者非天之心、豈難鬼始之学易者可被其凶乎、雖不祈請、天可□灾、可况祈請哉、頃之天快晴、月星見、天与善謂哉、此言善、謂学易一邊、非謂我是善人也、雪猶少下、然而余下車就坐、泰親祭之、不經程雪止、祭了歸

宅、召泰親賜衣、依天晴也、改着浄衣拜軍、依恒例也、都状成、佐作之、載左（後略）　（康治二年十二月）[45]

上記の記録には、五十歳に達していない人が『周易』を学ぶと凶が招かれるという言い伝えがみえ、その凶を避けるために泰山府君祭が行われた。その祭祀の実修者が安倍泰親であったことが文末に見てとれる。

十二世紀末には、『玉葉』の中の承安元年（一一七一）の記事から泰山府君祭が恒例の祭祀となったことが読み取れる。

廿五日、己巳昨今物忌也、今日、本命日、泰山府君祭也、泰親朝臣勤レ之、恒例事也　（承安元年四月廿五日）[46]

以上、古記録から泰山府君祭は主に、延命・栄達・病気平癒の際に用いられたことがわかる。ただし、特殊な例として、『台記』の周易を学ぶ際、凶事を予防するために泰山府君祭を行ったことが注目される。さらに、十二世紀半ばの段階で泰山府君祭が恒例の儀礼として貴族社会に広まった様子もわかる。

次節では、歴史記録にみえてきた泰山府君祭が、陰陽師が用いた祭文、つまり祭祀の実践者の側からみえてくる泰山府君といかに異なるかを祭文から検討する。

第二章　祭文における泰山府君

第一節　祭文における泰山府君

本章では、泰山府君が祭祀においていかに祭られ、祈りの対象とされているか、以下三つの祭文を検討していく。泰山府君祭の祭文は『朝野群載』に載せられている永承五年（一〇五〇）の祭文が初見である。

①後冷泉天皇泰山府君都状

謹上　泰山府君都状

南閻浮州大日本國天子親仁御筆年廿六　献二上　冥道諸神一十二座一

銀錢二百四十貫文　白絹一百二十疋　鞍馬一十二疋　勇奴三十六人

右親仁御筆。謹啓二泰山府君冥道諸神等一。御踐祚之後。未レ經二幾年一。而頃日蒼天爲レ變。黄地致レ妖。物恠數々。夢想紛々。司天陰陽。勘奏不レ輕。其徴尤重。若非レ蒙二冥道之恩助一。何攘二人間之凶厄一哉。仍爲下攘二禍胎於未萌一。保中寶祚於将来上。敬設二禮奠一。謹献二諸神一。昔日崔夷希之祈二東岳一。延二九十之算一。趙頑子之奠二中林一。授二八百之祚一。古今雖レ異。精誠惟同。伏願。垂二彼玄鑒一。答二此丹祈一。拂二除災危一。將レ保二寶祚一。刪二死籍於北宮一。錄二生名於南簡一。

延レ年増レ算。長生久視。親仁御筆謹啓。

永承五年十月十八日　　天子親仁御筆謹状[47]

後冷泉天皇（親仁）の都状では、天変地異が続いていて、それが陰陽師の卜占により最も宜しくない徴であると判断され、泰山府君祭が行われたと述べられている。これは後冷泉天皇の病気平癒のために死籍から名前を削ってもらい、生籍に記してもらうということが、その目的となっている。ここで注目されるのは、都状にみえる「冥道之恩助」という表現が『今昔物語集』本朝部の④「冥道モ哀ビ給テ」と類似することである。「冥道之恩助」が陰陽道神としての泰山府君にとっては、キーワードとなることが推定できよう。

次に、『朝野群載』に載る永久二年（一一一四）の記事から、十二世紀初頭の都状をみていく。

②藤原爲隆泰山府君都状

謹上　泰山府君都状

日本國從四位上行右中辨兼備中介藤原朝臣（爲隆）　年四十五

本命庚戌

行年庚戌

献二上冥道諸神一十二座一

銀錢二百四十貫

白絹二百二十疋

鞍馬一十二疋

勇奴三十六人

右某謹啓二泰山府君冥道諸神等一。夫信至高者天神憐レ之。慎至深者地祇護レ之。某官帯二右司郎中一。位昇二大中大夫一。是則蹐レ天跼レ地。仰レ神敬レ祇之故也。重祈二冥應一。更備二清奠一。聊薦二黍稷之味一。以望二明徳之馨一。伏乞。加級如レ思。昇進任レ意。踏二蘭臺一而攀二秋月一。歩二槐路一而接二青雲一。彼趙氏之延レ筭。誠是天應。此魯性之祈レ恩。盍レ成二地望一。息災延命。一家萬福。謹啓。

永久二年十一月廿三日　　從四位上行右中辨兼備中介藤原朝臣謹状

藤原爲隆閻羅天子都状

謹上二閻羅天子一

銀錢二十貫　絹十疋　鞍馬一疋　奴三人

右爲二延年益算一。送上謹状。

永久二年十一月廿三日　　從四位上行右中辨兼備中介藤原朝臣謹状

自餘五道大神。泰山府君。天官。地官。水官。司命。司禄。本命。同路将軍。土地霊祇。永視大人。

已上十二通同前効レ之[48]

以上の記事は、泰山府君と閻羅天子を対象に書かれた都状である。

それぞれ陰陽師と密教僧により執行されたと指摘できる。永久二年（一一一四）に行われた泰山府君祭は藤原為隆のために、昇進・息災延命・一家万福を祈願するものであった。さらに、同日の閻羅天子都状から、藤原為隆のために、閻羅天子を対象に密教行事が行われたことがみえる。閻羅天子都状には閻羅天子のほか、五道大神・泰山府君・天官・地官・水官・司命・司禄・本命・同路将軍・土地霊祇・永視大人といった神々が祭祀の対象となっていることがわかる。同日の泰山府君都状にみえる「冥道諸神十二座」と対応することが想定できよう。これは名称としての「十二座」の初出である。すでに『権記』長保四年（一〇〇二）には、「十三通」[49]の都状が用意するとされることから、十一世紀初頭から泰山府君が「冥道諸神十二座」といったグループの中に位置づけられたことが窺える。

さらに、十二世紀半ばから「陰陽道神」としての泰山府君の新たな姿がみえてくる。それが次の『台記』所収の都状である。

③謹上　泰山府君都状

南閻部州日本國内大臣正二位藤原朝臣某年

本命

行年

献上冥道諸神一十二座

右某、謹啓泰山府君冥道諸神等、夫府君者十二冥道之尊長也、司命司録、耀光於上天、白籍黒籍、記事於東岳、禍福唯依信与不信、壽夭又在祈、若被精誠立乗感應者欤、某謬在弱冠之齢、早忝輔辰之緘、器量疎兮備台鼎、塩梅之味无調、材幹短兮居星階、柱石之用難協、縱受餘慶於累祖蹤、争鎖積其毀於衆人之口、夫忠孝之道、披典籍以乃見焉、礼讓之儀、待文章以後顯矣、古典云、君子若欲化民成俗、其必由学乎、玉不琢不成器、人不学不知道、盖此謂也、是以爲收曠官之責、爲勵奉公之誠、専志於九經、竭力於六藝、性縱愚魯、学古思齊而已、俗諺云、易多忌諱、学者之荷仁可畏也、又云、五十以後可学此書、而明年甲子當革命否、雖爲瑣才之身、可開群議之序、革命之起出自周易、若不窺此書者、何以陣其趣、若又披此書者、恐不免其徴、然而俗人之諺未識所由、始学以事君父、則天須与善、嗜道以弁礼對、亦神盡幸謙、従幼学之齢、縱闖讀此書、到知命之年、將究其理、何必待五旬之筭、徒可枕一經之勤、新知人凶、誠非書凶、但唯云陰陽之方也、易迷者然微之境也、不知蒙冥道之加被、破厲階於未然、加之明年之暦相當重厄、弥致謹慎、將拂禍患、是故敬尊如在之礼、聊設惟馨之奠、易有明信、神其捨諸、縱有妖恠之可來、飜爲福祐、縱有運命之可被、氣便壽筭、伏乞玄鑒、必答丹祈、謹啓、

日本國康治二年十二月七日　　内大臣正二位藤原朝臣

某謹啓　　（康治二年十二月）[50]

右記の都状は『台記』康治二年（一一四三）の後半部分に記載されている。前半にある部分は、藤原頼長が『周易』を学ぶ際に凶事を避けるために安倍泰親に泰山府君祭を行わせたという記事である。この都状からは、康治三年（一一四四）に甲子の革命が起こるので、頼長

が『周易』を学ぼうとすることがわかる。甲子の革命は、変乱の多い年とされ、それを防ぐ目的で、この年にはよく改元が行われた。

この都状で注目されるのは、初めて泰山府君が「冥道諸神十二座」の中から特に重視され、「十二冥道の尊長」というように新たな位置づけを得ていることである。「夫府君者十二冥道之尊長也」という表現によって「冥道諸神十二座」の中から、泰山府君はその諸神の一番尊い神格となったことが想定できるのである。このような位置づけは、『台記』までにはみられないもので、泰山府君の神格の新たな展開を示している。「尊長」として位置づけられることによって、泰山府君が陰陽道神でも、最上位の神格になったことが指摘できるのである。

では、泰山府君はいかに「冥道諸神十二座」の「尊長」として位置づけられるようになったのか。それを探るべく、康治二年の泰山府君祭を執行した安倍泰親に注目していく。

第二節　安倍泰親

安倍泰親（一一一〇～一八三）は院政期に活躍した陰陽師で、安倍晴明から五代目の子孫にあたる。晴明から吉平―時親―有行―泰長―泰親という系譜になっている。泰親の予知や卜占はよく適中することが知られ、彼に関する記事が当時の『台記』や『玉葉』などの貴族の日記類に頻繁にみられる。また、逸話として十二世紀末に「指御子」として後白河法皇に称賛されたことが『平家物語』にみられる。[51] 安倍泰親が陰陽師として名声を得た時期は、先に取り上げた『今昔物語集』の成立と推定される時代、および『台記』と同時代である。『台記』にみえる記録によれば、三十三歳の泰親が泰山府君祭を行ったことがわかる。一方、泰親が『今昔物語集』の説話形成に大きな影響を与えたことが、『今昔物語集』本朝部における陰陽師、特に安倍家と安倍晴明にふれる話が頻繁に登場することから窺える。泰親と『今昔物語集』にみえる晴明伝承の関係については、山下が指摘するように、平安後期における安倍家と賀茂家の競合関係があったことが推定できる。安倍家は賀茂家と並んで二大陰陽家とみられたが、位階や官職の面では、賀茂家より下位にあったことから、泰親が晴明の活躍を顕彰し、貴族社会に安倍家の陰陽師としての力を積極的に宣伝した。ここから、『今昔物語集』にみえる晴明伝承が生まれたと推定されているのである。[52]

泰親はすでに十二世紀初期から晴明の験力を顕彰していた。長承元年（一一三二）五月十五日に安倍家の中で、安倍晴明の領地に関する訴訟があった。[53] その訴訟では、安倍泰親（当時二十三歳）は同じ安倍家の兼時（当時四十七歳）が晴明の領地を買い取って居住しようとしていることに対して訴え出た。泰親が晴明の領地に関して、代々から「公家の御祭」、すなわち天皇のために陰陽道の祭りを行う祭庭であり、兄の政文が死去してから、その長男の泰行に伝領した。しかし、前に政文の妻がその領地を他人に売却しようとしたとき、自分がそれを奏上し、停止する宣旨がくだされたが、今度は兼時が領地を売買しようとしている。これは宣旨に対する違勅にあたるため、政文の弟である自分が領地を守護したいというのが訴訟の内容である。一方、兼時は

領地が祭庭ではなく晴明から代々子孫に伝えられたものであり、自分が一門の氏長にあたるので譲り受けることに問題がないと申状を差し出した。

安倍泰親の一門は晴明からの嫡流だったのに対して、兼時の一門は支流だったが、当時継承者の泰行が幼年のため、兼時の売買には問題なかった。しかし、その後の展開に関して記録はないが、半世紀後の『玉葉』に載る治承四年（一一八〇）に泰親や彼の息子の家が火災により焼けたという記録から、どうやら泰親が領地を伝領したと推測できる。[34]

以上のことから、泰親と晴明の間には、密接な関係があったことが窺える。安倍家嫡流の泰親が晴明の伝承を通して、貴族社会に接近することに成功したことが、『玉葉』の泰山府君祭が恒例の祭祀であったと記している記事からも窺える。十二世紀において泰親が祭った泰山府君が「冥道諸神十二座」の「尊長」として新たに位置づけられることも、泰親の祖先、晴明が十世紀に泰山府君祭を作り上げたことと関係しているのである。

おわりに

泰山府君は平安後期に陰陽道の祭文において最上位の陰陽道神として新たな神格を獲得した。『権記』の泰山府君祭の記録からすでに十一世紀初期の祭祀の際に、十二神に向けて都状が用意されたことで、その時点で「冥道諸神十二座」という観念があったことが窺える。その際、泰山府君は「冥道諸神十二座」の中の一神と位置づけられたが、十二世紀に入ってからの陰陽道の祭文では、その神々の「尊長」として新たな位置づけを獲得する。このような展開は、『今昔物語集』や古記録では見られないが、『今昔物語集』本朝部にみえる「冥道モ哀ビ給テ」は直前の段階ではないかと考えられる。『今昔物語集』と『台記』を関連づけるなら浮かび上がる人物は、院政期に活躍した安倍家嫡流の安倍泰親である。泰親は『台記』にみえるように積極的に泰山府君祭の利益を貴族社会に宣伝し、始祖安倍晴明が作り上げた泰山府君祭を重視した。さらに、泰親の力により、院政期に泰山府君祭が恒例や四季の祭祀になり、泰山府君が新たに「冥道諸神十二座」の中の「十二冥道の尊長」として位置づけられるようになる。このように、泰山府君は陰陽道神として最も尊い神という位置づけを獲得する。泰山府君の利益も延命長寿や病気平癒という範囲を越え、『台記』にみられるように、『周易』を学ぶ際に招く凶事を予防することまで広まる。このように、院政期における泰山府君は『周易』との繋がりから見えるように、仏教にはない、凶事を避ける力を獲得していく。このような泰山府君は陰陽道独自の世界観の中に存在していたのである。

〔注〕

（1）村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房　一九八一年、斎藤励『王朝時代の陰陽道』甲寅叢書　一九一五年、（再版）名著刊行会　二〇〇七年、下出積与『日本古代の神祇と道教』吉川弘文館　一九七二年

（2）山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院　一九九六年、初提示は山下克明　村山修一［ほか］編『陰陽道叢書』四冊　名著出版、一九九一、一九九三年

（3）陰陽寮は「陰陽」「天文」「暦」「漏剋」という四部から構成され、そ

の中に、博士と学生、さらに陰陽部門に陰陽師という専門家が設置された。その主な職務として、怪異の占事や相地、天文変異の占術、暦の測定と作成、漏剋の測定と告知などがあった。

（4）山下、前掲（2）

（5）速水侑「貴族社会と冥府の修法」『平安貴族社会と仏教』吉川弘文館　一九七五

（6）斎藤英喜『陰陽道の神々』思文閣出版　二〇〇七年、増補版　二〇一二年

（7）斎藤、前掲（6）

（8）泰山府君は鎌倉時代以降に「天曹地府祭」において祭られてくる。その祭祀は、王権儀礼と結ばれており、天皇即位の儀礼や将軍代替りの際に行われていた。

（9）『搜神記』中國古典文學基本叢書　中華書局　一九七九年

（10）増尾伸一郎「泰山府君祭と「冥道十二神」の形成」田中純男編『死後の世界』東洋書林　二〇〇〇年

（11）小峯和明「泰山逍遙」『中世文学研究』二五号　一九九九年八月

（12）酒井忠夫「太山信仰の研究」『史潮』第七巻第二号　一九三七年

（13）澤田瑞穂『地獄変：の冥界説』平河出版社　一九九一

（14）山下克明「陰陽道信仰の諸相―中世初期の貴族官人・都市民・陰陽師―」、上杉和彦編『経世の信仰・呪術』竹林舎　二〇一二、または山下克明「密教修法と陰陽道」、大橋一章・新川登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築―東アジアのなかの日本―』勉誠出版　二〇一二。顕密体制論については黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』岩波書店　一九八四年

（15）この場では、「特定の意味をもつものではなく、一定の規則に基づいた単なる行為」をさす。（「日本宗教研究における儀礼学の論点」ドルチェ、ルチア／松本 郁代【編】『儀礼の力 - 中世宗教の実践世界』法蔵館　二〇一〇

（16）教理、信仰、救済に価値をおく宗教観。

（17）斎藤英喜「呪詛神の祭文と儀礼―「呪詛祭」の系譜といざなぎ流「すその祭文」をめぐって」、ドルチェ、ルチア／松本 郁代【編】『儀礼の力―中世宗教の実践世界』法蔵館　二〇一〇、斎藤英喜「祭文・祝詞　―「土公神祭文」をめぐって―」、上杉和彦編『経世の信仰・呪術』竹林舎　二〇一二

（18）出典は『三宝感応要略録』巻中・第六十。同話は『三国伝記』巻七・第二。

（19）『今昔物語集』新日本古典文学大系　岩波書店

（20）前掲（19）の頭注によれば、貞元十九年は八〇三年の誤である。

（21）泰山は、「大山」または「太山」と表記される場合も多いが、本論では「泰山府君」という表記を用いることにする。

（22）小峯は「羅什の旧訳を昔聞いたときには心身清涼を得たが、新訳はそういうことがない、旧訳をたもて」と解釈している。小峯和明「泰山逍遙」『中世文学研究（二五）』一九九九

（23）小峯、前掲（22）

（24）経典を読んでもらう神に関しては、日本における神仏習合の初期にみられる在地の神々がみずからの神身から解脱を他国神たる仏に求め、そのために僧侶に経典を読んでもらう事例との類似が考えられる（中村生雄『日本の神と王権』法蔵館　一九九四年）

（25）出典は『冥報記』巻中・第一。同話は『雑談集』七、『法華伝記』八、『法華験記』巻下、『法苑珠林』十八、『太平広記』九八九。

（26）姓名を伝えることで、泰山府君に死籍を調べてもらうことを意味しているのではないかと推測できる。

（27）小峯、前掲（22）

（28）金偉「『今昔物語集』の地獄・冥界説話に関する考察」『大谷大学大学院研究紀要』（二七）　大谷大学大学院　二〇一〇年

（29）原文では「神」と表記。小峯（22）には、やや下位の神の印象が強く、話中でも終始、「神」といわれ、「府君」と呼ばれないと述べている。

（30）出典は『冥報記』巻中・第十五。同話は『法苑珠林』六、『太平広記』二九七。

（31）『今昔物語集』前掲（19）

(32)『発心集』『宝物集』『三国伝記』に三井寺の知興内供とする。さらに、晴明の泰山府君祭執行よりも師匠の身代わりとなった弟子の活躍が重視されていく。弟子が信仰していた不動明王が哀れみ、師匠・弟子ともに救済してくれるという話に変容している。
(33) 武田比呂男「安倍晴明」説話の生成」、斎藤 英喜、武田 比呂男(共編)『「安倍晴明」の文化学―陰陽道をめぐる冒険』 新紀元社 二〇〇二年
(34)『小右記』 大日本古記録 岩波書店
(35) 長部和雄「唐代密教における閻羅王と太山府君」『唐宋密教史論考』 永田文昌堂 一九八二年
(36)『焔羅王供行法次第』 大正新脩大蔵経二十一
(37) 長部、前掲(39)
(38) 長部、前掲(39)
(39) 坂出祥伸「日本文化の中の道教―泰山府君信仰を中心に―」、中村璋八博士古稀記念論集編集委員会編『東洋学論集：中村璋八博士古稀記念』 一九九六年
(40)『權記』 史料纂集 続群書類従完成会
(41) 斎藤英喜『安倍晴明：陰陽の達者なり』 ミネルヴァ書房 二〇〇四年
(42) 繁田信一『平安貴族と陰陽師：安倍晴明の歴史民俗学』 吉川弘文館 二〇〇五年
(43)『殿暦』 大日本古記録 岩波書店
(44) 同年十月十二日の記事に師の藤原成佐の案により、甲子革令に備えるために、『周易』を学ぶということが記載されている。
(45)『台記』 史料纂集 続群書類従完成会
(46)『玉葉』 国書刊行会 一九〇六年
(47)『朝野群載』 新訂増補・国史大系 吉川弘文館
(48)『朝野群載』 前掲(51)
(49) 増尾、前掲(10)には、「十三通」に関して、十二神各神格と総申文であると述べる。
(50)『台記』 史料纂集 続群書類従完成会
(51) 小坂眞二「安部泰親の占験譚をめぐって―火災占の所主・推断法」『東洋研究』第一三二号 一九九九年
(52) 山下克明「安倍晴明の邸宅とその伝領」『日本歴史』第六三二号 二〇〇一年、山下克明「安倍晴明の「土御門の家」と晴明伝承」林淳、小池淳一編『陰陽道の講義』嵯峨野書院 二〇〇二年
(53) その記録に関しては、源師時の『長秋記』に詳しく記されている。
(54) 山下、前掲(56)

PREMOSELLI GIORGIO（ぷれもせり じょるじょ）
文学研究科仏教文化専攻博士後期課程
（指導教員：斎藤 英喜 教授）
二〇一三年九月三十日受理